

第5学年2組 道徳科学習指導案

- 1 主題名 権利の主張 内容項目 [C 規則の尊重]
- 2 ねらい 権利や義務の観点から自分や相手の行動などについて考えを深め、互いの権利を尊重して
いこうとする心情を育てる。

教材名 「遊園地のできごとから」(出典:「新しい道徳5」東京書籍)

3 主題設定の理由

(1) ねらいや指導内容について

本時は、小学校第5学年及び第6学年の内容項目「法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切にし、義務を果たすこと。」に関するものである。この内容は低学年の「約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。」や中学年の「約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること。」を通じて育まれ、中学校の内容項目「法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。」に発展していく。

人間は、法やきまりは自分たちを拘束するものとして自分勝手に反発したり、自分の権利は強く主張するものの、自分の果たさなければいけない義務をなおざりにしたりする。その中で法やきまりが個人や集団が安全にかつ安心して生活できるようにするためにあることを理解し、自他の権利の尊重とともに義務を果たすという精神をしっかりと身に付けることが大切である。

指導に当たっては、自他の権利を尊重するとともに、義務を遂行せず権利ばかりを主張していたのでは社会は維持できないことについても具体的に考えを深め、身近な集団生活を送る上においても、みんなが互いの権利を尊重し合い、自らの義務を進んで果たす大切さへの理解と積極的な行動ができるようにすることが大切となる。

(2) これまでの学習状況および児童の実態について

本学級の児童は、学習や生活に対し意欲的に取り組める児童が多い。また、きまりや約束を守って日々生活できる児童も多い。一方で、きまりや約束が守れていない場面においては、「みんなも守っていないからよいだろう」「言われなければよいだろう」と易きに流れ、その結果周りの人に迷惑がかかっていることに気づけない児童もいる。また、きまりや約束を守れていても、守ることで個人や集団が安全に、安心して生活できる良さを実感できている児童は少ない。そこで本時では、権利や義務の観点から自分と周りの人との考え方の共通点や相違点についてグループで比較検討することで、道徳的価値を多面的・多角的に考えさせ、そこから互いの権利を尊重し、きまりやルール
の意義を理解したうえで進んで義務を果たしていこうとする姿を育てたい。

(3) 教材の特質や活用方法について

本教材は、「権利」と「義務」について日常生活を例に考える場面と、主人公が遊園地で経験した出来事が描かれた漫画を基に話し合っていく場面の二部構成になっている。前半では、普段「権利」「義務」という観点で考えることが少ない児童が日常生活場面と結びつけて話し合うことで、これらを身近なものとして感じられるようにしていく。後半の漫画では、自分の息子に遊園地のショーを見せてあげるために肩車をするお客さんとそれを止める係員、その間で葛藤する「わたし」の姿が漫画で描かれる。

主に次のことを話し合うことにする。

①たくさんの客でショーがなかなか見えないときのわたしの思い。

たくさんの客が前にいることで、わたしの客としての「ショーを見る権利」が保障されていないことに対する不満について共感させる。

②目の前で肩車をした親子を見たときのわたしの思い。

ショーを見る権利を強く主張することについて、わたしの視点から「客なのだから、よく見えるようにすることはやむを得ない」という思いと「他の人にも客としてショーを見る権利はあるから、おかしい」という相反する思いについて、友達の意見から多様な感じ方や考え方を持てるようにする。

③遊園地から帰るときのわたしの思い。

たとえ客だとしても、自分の権利だけを主張することは周りの客の権利を奪うことになること、それを防ぐために係員が声かけをしていたことに気づけるようにする。

以上の理由から本主題を設定した。

4 学習指導過程

	学習活動・発問	予想される児童の反応	・指導上の留意点☆評価の視点
導入 (5)	1 「権利」や「義務」について考える。 ○ア・イの中に「権利」と「義務」のどちらの言葉が入るか考えましょう。	・アは、「権利」。なぜなら、学校の図書館では、自分の選びたい本を自由に借りることができるから。 ・イは「義務」。なぜなら、借りた本を返すのはきまりだから。	・教科書 P.116 の内容を生かして、「権利」と「義務」の意味について確認する。 ・「権利」と「義務」のどちらの言葉を入れたか理由も併せて聞く。 ・「学校図書館」の例だけでなく、日常生活の中には「権利」や「義務」に関する出来事が存在していることを想起させる。
	「権利」を主張するとき、どんなことを大切にしたらよいのだろう。		
展開 (37)	2 「遊園地のできごとから」を読み、話し合う。 ○ショーが見えにくいときのわたしの気持ちはどんなだったか。 ○わたしの前で肩車をし	・前のお客さんのせいであまりよく見えない。 ・楽しみにしていたのに。 ・わたしだってお客さんののに。 「しょうがない」	・1人1人が「わたし」になったつもりで考えられるよう、声をかける。 ・スライドショーで場面を示す。 ・客として「ショーを見る権利」が守られていない不満に共感できるようにする。 ・第二発問に入る前に、わたしと同じ思いを持つ親子がいることに触れ、スムーズに話し合いに入れるようにする。 ・児童に葛藤が生じやすい場面から、児童の反応を肩車をした親

	た親子を見て、わたしはどんなことを考えたか。 ○遊園地から帰るとき、わたしはどんなことを考えたか。 3「権利」の主張について自分との関わりで考える。 ○自分の「権利」を主張するとき、どんなことを大切にしたらよいでしょう。	・親子にもショーを見る権利はある。 ・お金を払っているのだから、ショーを楽しみたい気持ちは分かる。 ・私もお客さんだから肩車してもらおうかな。 <u>「おかしい」</u> ・私も後ろのお客さんも見えない。 ・わたしもお客さんなのに、ひどい。 ・係員の人も注意していたように、危ない。 ・自分が客でも、自分の権利ばかりを主張してはいけない。周りもみんな客なのだから。 ・係員の注意は、みんなのことを考えてのものだったんだ。 ・相手の権利や気持ちも考えたうえで、自分の「権利」を主張することが大切。	子を「おかしい」と「しょうがない」の二つの立場に分け、それぞれの思いを聞くことで多様な感じ方や考え方を引き出せるようにする。 ・考える際には、黒板の「権利」と「義務」それぞれの意味を適宜振り返って考えられるよう、声かけをする。 ☆肩車をする親子を見て、多面的・多角的に考えている。 (発言・ノート) ・たとえ客だとしても、自分の権利だけを主張することは周りの客の権利を奪うことになること、それを防ぐために係員が声かけをしていたことに気づけるようにする。 ・自分の経験を想起させながら考えさせる。 ☆「権利」を主張するときに大切なことを自分との関わりで考えている。(発言・ノート)
終末 (3)	4 教師の説話を聞く。		・教師自身が「権利」を主張するときに大切にしていることを紹介する。 相田みつをの詩

5 他の教育活動との関連

- ・授業や日常生活においては、お互いの権利を尊重しながら活動できるようにする。
- ・宿泊学習のような公の場では、他の利用者や施設の方のことを考え、きまりやマナーを守って活動できるようにする。

6 評価の視点

【物事を多面的・多角的に考えている様子】

・ 友達の多様な考えを認め合いながら、自分の考えを伝え、話し合っている。

【道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】

・ 「権利」を主張するときに大切なことを自分との関わりで考えている。

7 板書計画

権利

なにかを自由に行ったり、
だれかに なにかを求めたりできる

義務

しなければならないこと、
してはならないこと

遊園地のできごとから

「権利」を主張するとき、どんなことを大切にしたらよいのだろう。

ショーが見えにくいときの私の気持ち

・ 前のお客さんのせいで、見えない。
・ 楽しみにしてたのに。
・ わたしだってお客さんなのに。

肩車をした親子を見て

しょうがない

・ 見る権利があるから。
・ お金を払っているし。
・ わたしもそうしようかな。

おかしい

・ みんな見えない。
・ わたしもお客さんなのにひどい。
・ 危ない。

遊園地から帰るとき

・ 自分が客でも、自分の権利ばかりを主張してはいけない。
・ 周りもみんな客なのだから。
・ 係の人の注意は、みんなのことを考えてのものだったんだ。

○自分の「権利」を主張するとき

・ 相手の権利や気持ちも考えたうえで、自分の「権利」を主張することが大切。